

# 序分義を通して見たる善導大師

## 序分義の梗概

福 島 愍 雄

高祖大師一千二百五十の諱辰を邀ふるに際し、摩訶衍同人胥謀り報恩謝徳の爲め、大師讃仰の書を出版せんことを決し五部九卷を同人全部に分擔執筆せしむることとなり、予には序分義を指定せらる。平素其疏に親しみ居らざる予が倉卒裡素讀して此序分を通して高祖の卓見を窺はんことは容易の業にあらず。愁ひに臆説を並べて大師の高徳を傷けんことを虞るゝの餘り單に御疏の御趣旨を摘記するに止めおく。

大師の御卓見楷定の疏たるを知るには前段の玄義分に如くはなし。序分以下は觀無量壽經の本文に就て疏通せられたるもの、中に就て此序分義は彌天の道安以來先賢の例に倣ひ、序、正宗、流通の三段に分かつ中の初分にして、一經の由來、緣起を述べたる所を如是我聞以下一千三百五十五字迄の文に定められたのである。

序文を分ちて證信、發起の二序となす。

(一) 證信序、結集者が經文の首に如是我聞の四字を安くの理由を説明して夫を證信と云ふ。別して此觀經は佛弟子阿難が、世尊の依囑を受けて復説したる經にして阿難の人格を透ふして確信するに足ることの證となること云ふ意味である。

經文は後世比丘の結集に成りたるものにして、佛陀世尊の直筆ではないが、直筆として信じて差間ないこと云ふ意を表して如是我聞と云ふ。

如是の二字は能説者釋尊、我聞の二字は能聽者たる阿難を指す。私は佛陀より此の如く聞きました。

又の一説には、佛陀所説の法を如是云ふ、即ち世尊所説の法は悉く眞理に如ひ秋毫の誤謬もない、之に従つて修行せば必ず當果を得、故に是に如ふ。今阿難が鷲峰に在つて復説せる此經は釋尊、王宮に於て韋提希夫人等に向つて説示し玉へる金言であるから如説修行せば往生疑なきことを信ぜよ。

抑、阿難は如何なる人物か云ふに、中阿含經によれば、世尊、五十五歳の時、新に常侍一人を索め玉ふ、五百の比丘、我れ其選に當らんこ相争ひしが、衆議の結果、阿難其推擧に與りて此重任に就くに至れり。阿難は佛成道（三十歳）の四月八日生こ云ふから此時は方に廿六歳である。之より廿五ヶ年間常隨給仕して世尊の説法を悉く聽聞憶持して居つたのである。涅槃經（南本涅槃會疏卅六）に曰く佛、文殊菩薩に告て曰く、阿難は佛に事ふるここ、二十年（恐くは五の字を脱するか）にして八種の不思議を具せり、一は別請を受けず、二は故衣を受けず、三は非時に佛を見ず、四は一切の女人を見て欲心を生せず、（註 阿難は頗る好男子にして女子の愛慕する者少からず、或時一婦人兒を背ひ井邊に至り水を汲みしに阿難に見れ釣瓶繩を幼兒の首に卷付けたるを覺へざりし事あり云ふ、以て其美貌たるを窺ふに足る）五は一切法を憶持して再問せず、六は佛所入の定を知る、七は佛所に至る者の受益不同を知る、八は悉く能く佛秘密の法を了知す。

即ち佛所説の一切の法を善く記憶して忘る、ここなく、又佛言説に發し玉はざる意中秘密の法をも了知せりといふ。されば、阿難の説は即ち佛説なり云ふも過言にはあらじ。人或は言はん、阿難は世尊五十五歳以後の侍者にあらずや然らば其以前佛成道三十歳よりの廿六年間の説法は聽聞し居らざるここなる。然れば此間の阿難の説は佛説にあらずこ。報恩經之に就て左の如く記せり、

二十年中所説の法を重て我が爲に説き玉へこ、佛粗ほ言端を示すに阿難皆解せり智速に根利にして強持力の故にこ、即

ち佛の加被力によつて三昧を證し三昧中に未聞の說法を皆悉く聽聞せり。

此の如き人格者たる阿難の說法は聞く者皆佛陀より直接聽聞するも同等なりと深く信を生ずること、なる。此義を表さんが爲めに如是我聞の四字を置きしを、大師之に證信序と銘を打ち玉ふ。

(二) 發起序、大師は之を七科に小分せられて居る。

- (1) 化前序
- (2) 禁父縁
- (3) 禁母縁
- (4) 厭苦縁
- (5) 欣淨縁
- (6) 散善顯行縁
- (7) 定善示觀縁

今此七科を逐條依文釋義して行くに餘り長文に流れるから、只其梗概だけを記述することにする。

此經は韋提希と云ふ女性を發起者としてお説になつたものであるが、夫は何時、何處で何時處を記されたものが次の文である。一時、摩訶陀國、王舍城の東北方靈鷲山にて佛陀が千二百五十人の大比丘衆、及菩薩三萬二千人を集め說法せられて居つた時である。世尊五十ヶ年の說法を五會に分ちまするに第一會は鹿野苑の說法、第二會優留頻地方、迦葉への說法、第三會王舍城の說法、竹林精舍、次で頻婆沙羅王の建設に係る靈鷲山、一化五十年は主として此處に於て化導し玉ふ。第四會鄉里迦毘羅城。此第四會は第三の後と云ふ意味ではない。第三會としたる王舍城は佛說法の最後、迄は此會坐に攝するが故に、佛陀の親族は郷里の第四會にて出家入門せられて居り、阿難尊者も此時入門して居らる。第五

會は祇園精舎の説法。以上五會に分ちたるは年代順ではない。前述の如く第三會王舎城の説法は便宜五十年間の説法を之に攝入したのであるから従つて此經の説時は何年何月を確定することは出来ないが、此經所説の時大比丘衆千二百五十人列座せりあり、其比丘衆千人は、第二會優留頻地方教化の三迦葉が千人の弟子と共に入門せるもの。二百五十人は第三會王舎城の會坐にて入門せる舍利弗、目連等なる故其後の説法なること推知せらる。

又阿難が世尊の常侍となりて後なることは本經中に佛告阿難にあるによりて知らる。此阿難は迦毘羅城説法の時の入門なれば此後なることは自明である。阿難は前述の如く世尊五十五歳の時、常侍となりたるものにして如何に多聞第一の譽あるも多數の門弟の中より此阿難を特に選抜して此經を付屬するには相當の年數を経過して居つた事を推せらる。然れば本經の所説は佛陀晚年を認定して可なりと思ふ。

即ち此經は王宮の一大悲劇のあつた時釋尊は中印度摩訶陀國王舎大城の東北方靈鷲山に於て説法遊ばされて居つた時にて時處を明して、未だ説法の御口を聞き玉はざる前、即ち教化を起すの前なるが故に之を化前序と呼ばれたのである。愈よ之より發起者韋提希夫人が、釋尊に心願して救濟を乞ふに至つた動機を緣起として説明するのだから禁父緣等皆緣の字が付してある。序云ふも緣云ふも同義である。由序即緣起であるからだ。此五濁惡世四苦八苦に逼められて苦悶懊惱して居る人生を代表して韋提希夫人云ふ貴婦人を拉し來り、云何に人世の悲慘なるかを巧に表現し、佛教の二大系統中、他力本願教の教旨、所求、所歸、去行を説示して終に之によつてのみ人類は平等に救濟さるゝものである云ふ大要を述べたもので正宗分云ふ本論に入るまでを發起序云はれて居る。

釋尊の郷國印度に於て五天の中の中印度、而かも十六大國中の摩訶陀國（註摩訶陀は不害を譯す此國には古來刑戮死刑に處せられたるものなし云ふ意）王舎城主の地位にありたる頻婆沙羅王が、我子阿闍世の爲めに七重の獄内に幽閉監禁せられて水食とも與へられず、聽て餓死せんとする苦境に置かれたるに起因して、夫人韋提希の妻としての貞

操、母にしての慈愛を罩めたる人情劇こそ今經の如き他力本願經の緣起となつたのである。

忽然、大王監禁的一幕が演ぜられた。之を聞いた夫人韋提希、夫君の安否を案じ取る物も取敢へず、先づ夫君を訪ねんミ、密に飲食物を用意して牢内に赴く。大王は之によつて饑渴を忍び豫て教化を蒙むり居れる釋尊の掛錫し玉へる驚峰に向つて遙拜し授戒、説法を念願せり。乃ち目連は請に應じて王宮に疾走して八戒を授け、富樓那は赴いて説法し王を慰諭す。仍て王身心安祥として三七日を過ぐ。蓋し人三七日斷食せば命を斷つは普通なり。太子謂へらく、父王幽閉已に三七日を経たり、最早絶命し居るならんミ。門衛に就て此由を質す、豈圖らんや父王今猶安全なりミ。更に其由を問ふ、守衛之を秘するに由なく事の始終を言上す。太子之を聞いて赫怒し、我母は國賊に與みする大賊なり、釋の弟子は幻術を以つて惡王を救ふが故に之れ惡人也ミ。直ちに利劍を執つて母堂を殺害せんミせり。

若し月光、耆婆の忠臣ならんか、阿闍世は故國を追はれ、逆罪者、未生怨の惡名を永く經史に傳へ命終後は墮獄の苛責に逢ふべかりしに、幸ひ二人の忠臣あり身を供して苦諫し竟に太子を翻心せしめしかば母君の一命は存し、太子は後日、國王に墮獄の苦患を免がる、を得。母君は世尊に教化を請ひて現當二世の安樂を得。又末代凡夫救濟の手引をさる、こゝ、なつた。

當時印度文化の程度を察するに婆羅門族には四吠陀ありて道學は一通り行亘つて居た事と思はる。月光が、臣毗陀論經の説を聞くに劫初已來乃至無道にして母を害するを聞かず今此殺逆の事をなさば刹帝利の門閥を汗さん臣聞くに及びず是れ梅陀羅なりミ。此人倫の大道を説きて切諫せしを見て文化の稍進みしを察するに足る。

此忠臣の誠意によつて母君死より免る、を得たれども、太子の餘憤未だ息まず。且つ父王を赦すの意志なきミ見へ母君を解放して自由の身ミなさば復た父王に接近して救助すならんミ、仍て母君を父王ミ別室の深宮に監禁すること、なつた。

夫人も亦宮室奥深くに幽閉せられて自由を縛ばらるゝに至り、我身の上の不幸よりも夫君の身上を案じ煩ひ、夫君今若し妾が監禁せられしを聞き玉はゞ如何にお嘆き遊ばさるゝならん。また妾が水米を供せずば王の命脈且夕に迫らん、彼を想ひ、此を念へば嗟乎、何たる悲哀ぞや。夫君は大國の君主、妾は其太后、人としての榮を究め、求むる處もして得られざるなき一天萬乘の至尊でありながら、而かも我が腹を痛めたる一人子の太子より此憂き目を見せらるゝ、こは何等の痛恨事ぞや、悲憤切々、情緒割くるが如く、顔色憔悴たり。古人謂く窮すれば通ず、人は悲觀のどん底に徹すれば此どん底を足場として立脚することを得るものである。韋提希夫人若し宮中に皇后として愛護せられ何不自由を感じざりせば人生を醉生夢死されたであらうが、今此悲劇に遭ふて、方めて人生に目醒めて活路を見開かんこの念が生じたのである。

此秋夫妻共に嘗て師表として教を受け居る釋尊の事を想ひ浮べ、願くば世尊、昔日の如く、阿難、目連をお遣はしになつて妾の今の境遇を慰め玉へ、こ悲泣雨涙、嘯哭哀願し奉つた。世尊は時に鷲峰に在つて千二百五十人の大比丘衆共に御說法中であつたが、夫人の心願を了知し玉ひ直ちに隱没の相を現して宮城内に出現遊ばされた。夫人叩頭拜禮已つて面を舉ぐれば眼前には百寶蓮華に坐し玉ひ左右に目連、阿難を侍べらしめ玉光顔端正なる大聖世尊釋迦牟尼佛の顯れ玉ふを拜す。夢かこばかり驚喜して勿體ない、恐れ多い、こ恐懼する反面には、お懐かしい、御慕はしい佛様、こお継り申す態度を、經文には自ら瓔珞を絶ち、擧身を地に投じ、號泣して佛に向つて白して言さく、こあり。

世尊よ妾等は宿世に何か悪い因縁があつたのでせうか。現在生みの我が子から斯様な逆待をされるこは何にしても判りません。斯の如き不倫な行爲を、何卒因果律によつて其緣由をお聞かせ下さい。最早、妾は此如き處は厭いやであります。此世界は王宮すら此の通ですから到る處苦惱に充たされて居るに違ひありません。何卒、悪人の居ない惡聲も聞かざる世界が有るならば御教示下さい。因縁を開かんこするの底意には自己宿縁の記憶が再起して罪惡を懺悔せんこする良

心の光明がひらめき初めた時丈け夫丈け心の奥深くより哀願して眞實至誠、樂土を求むるに至つたのである。

以上が禁父、禁母、厭苦、欣淨の大意であるが、相當文化の開けたる國、而かも將來一國の君主とも成るべき身が、何故斯かる逆罪を犯すに至つたかは、此經には唯、調達惡友の教に隨順してある丈だが、大師は涅槃經等の記事によつて阿闍世を未生怨、婆羅留支を折指と譯する因縁よりして、太子出生の因縁を記して曰く。大王子息無きを嘆きて諸神に祈りしも其驗なかりき。或時一人の占相師來つて曰く、今某山に一人の仙人あり壽命盡きて後は王の子息ならん。王之を聞き、仙人の天壽を終るを待てず、勅使を遣はして仙人の命を請はしむ。仙人假令死後、王の太子なるも天壽を完うせずして命を奪はる、を肯せず、乞ふ三年を待て、使者之を報ず。王我實子を得るを知つては三年は愚か一日も猶豫し得ず、王の權威によつて彼が命を奪はしむ。仙人死地に臨み使者に語つて曰く、須く王に告げよ、我天壽未だ盡きざるに心口を以て強て我身を奪ふ。我若し王の兒ならば還た心口を以つて人を遣して王を殺さしめん。告げ終つて死に就く、仙、死したるを同時に夫人懐胎す。王之を聞いて大いに喜び、相師を喚んで之を占はしむ。相師曰く、此は男兒なり、生れたらんには王の爲めに損失あらん、大王曰く、些々たる損失何かあらん、我に子あらば我財寶國土は悉く其子に與ふる覺悟ありて大言壯語せられたるが、更に翻つて仙人遺言の言を思ふ。仙人は我子となつて我命を奪ふに、茲に於て悲喜交々至る。密に夫人に語り、誕生の時高樓に昇り、天井に穴を穿ち夫より地上に落生せしむ。仙人臨終の一念力にや、所生の兒落命せず。僅に小指を傷けしのみ。仍て世人呼んで折指と云へり。又此因縁によつて太子未だ生れざるより父王に此怨あり之を未生怨と呼ぶ。

時に釋尊の從弟に提婆達多一名調達なるものあり。悉多太子（世尊の幼名）十二歳の時多數の童子を園内に遊戯せり此時空中に群雁飛行し、提婆一雁を射る。其雁悉多太子の園中に落つ。太子之を愍みて箭を抜き傷を療治す。提婆之を求めしも太子與へざりしかば之より提婆は太子に怨を結ぶに至る。（佛本行集經十二）而して一日の長たる提婆は、太

子が佛陀となり四姓の歸仰することを觀て嫉妬憤懣遣る瀨なく、何かにして我佛陀に克たんこ。終に舍弟阿難に強談して通力を傳授せしむ。一、空中に騰る通力、二、自身色境に入る、三、山河等自身に入る、四、大小自在に身を現す等の通力を得て、或日阿闍世太子の殿前、空中に登り身邊より或は水を出し火を出だし或は大身を現じ或は小身を顯はす等の奇術を示す。太子之を見て大に歸依し佛の如く尊敬するに至る。

提婆、太子の我に心服せるを看破して、折指太子の許に至り王子を誘惑するに折指の因縁を以てす。増一阿含經に曰く爾の時提婆達多便ち婆羅留支（折指太子）の所に至り王子に告て言はく、昔は民萌壽命極て長し、如今人壽は百年を過ぎず。王子當に知るべし人命は無常なり終に位に登らずして中ごろ命終せば亦痛しからずや。王子は父王の命を斷つて國人を統領すべし。我は今當に沙門瞿曇を殺して無上至真等正覺を作るべし。摩竭陀國界に於て新王、新佛さならば亦快からずや、日の雲を貫て照さる所なきが如く、月の雲消て衆星の中に明なるが如しこ。爾時に婆羅留支王子即ち父王を收めて鐵牢の中に著け、自ら王となつて人民を統領す。始め太子提婆の進言を信ぜざりしも、生誕の時の折指の事實を指摘して示せしかば竟に其れに誘惑さるゝに至れりこ。

此記事は事實談であるか將た權化の方便としての一種の劇なりや、は讀む人の選擇に委せん。孰れにしても人世の五濁惡世にして八苦の界なるこを巧みに織り成せる悲劇を見ば、二河白道の夫共之を入信の出發點として茲に立脚し更に更生進趣しなければならぬこをお勧めする。

再び欣淨緣に還りて記述するこを、せん。

世尊は夫人の切なる哀願を容れられ先づ肩間より光明を放ちて十方淨土を照し其光明佛頂に反映して金臺となり其中に十方の淨土を顯現し玉ひ、夫人をして之を觀ぜしめ自ら所求の淨土を選擇せしめ玉ふ。夫人光臺所現の淨土何れも殊勝なりこ雖、我は西方極樂世界に往生せんこを樂ぶこて別して西方の一土を選擇す。

今夫人十方淨土を觀見す。然るに佛々平等なれば淨土も亦平等無差別なるに夫人は何故別して西方の一土を選求せるや。又夫人今始めて阿彌陀佛を拜す、佛々平等の中、此れ阿彌陀佛とは如何んが知り得たるに微細に亘つて傳通記に論じて居るが、西方淨土の諸佛淨土に超勝して居ることを論ずることになれば之のみ一個の論題にして記述しなければならぬし、又、正宗分中に之を詳述せらる、方もあらん。仍て其方に譲りて今は省略させて戴く。

夫人、今親く佛力によつて十方淨土を觀見し自分の求むる所の淨土は西方極樂世界に決定したから、次は去行、即ち西方極樂に生る、には如何なる事をなせば可なるや、私の定心をして觀見せしめ玉へ、懇願せしかば、其請を容れて直ちに定善を説くべきに、世尊は韋提の致請を緣由として一大事因緣たる凡夫往生の散善を開示せんして三福の行を生因として顯し玉ふ。

大師の散善顯行緣を科し玉へる下、經文には散善の前に定觀を説き玉ふ、夫を大師が散善顯行緣とし玉へる思召を察するに、大師自身罪惡生死の凡夫に自覺し玉ひ、末代一切善惡凡夫の爲めには定觀より散善の方が實行し易いこの見地より散善を觀佛以上に須要に思召されてのことであらう。此處經文に、阿彌陀佛去此不遠とあるを、大師は三義を以て説明して居らる。一、分齊不遠、十萬億刹を超過すれば彌陀の國なるが故に無量刹土に比較すれば猶近しと云ふべし。二、里程遙なりと雖、去る時一念に到る。三、注心觀念すれば定境相應して行人自然に常見するが故に。一月天に在つて影萬水に浮ぶ、月降り下らず、水昇り上らず。とあるが如く觀心、又は信心あれば佛心を見、佛光を拜することを得、今現に佛身を拜するを得れば焉んぞ佛土を觀ざらん。之れ去此下遠なり。

世尊の本意は定散一切の機類を救濟せんとし玉へるが、定心は難く散心は多し。故に韋提の致請に因みて散善を自開し玉ふ。(定とは心を一境に住めて専ら其境を觀見すること。散とは心散亂して一境に住まらず故に境を觀見し得るに非ず)夫を三福と名づく、所謂、世福、戒福、行福、之也。二に世福とは世間的善行で第一は孝道、儒道二教の連中が

佛教は孝道を説かずして攻撃せる者多かりし爲めか、大師は疏に父母は世間福田の極也、佛は出世間福田の極也と記して、其次に左の如き事を叙せられて居る。

佛在世の時飢饉年あり。人皆餓死して白骨累々たり。諸の比丘等乞食するに食を得難し。時に世尊は比丘等の去るを待つて獨自城に入つて乞食し玉ふ。且より中に到まで門々喚び乞ひ玉へぎも食を與ふる者なし。佛還た蓋を空うして歸り玉ふ。明日復去玉ふに又還得玉はず。後日復去玉ふに又亦得ず。忽ち一の比丘あり道に逢て佛を見上るに顔色常に異にして飢相あるに似たり。即佛に問玉ふて言さく。世尊今已に食を竟玉へりや。佛言く比丘、我三日を経て已來乞食するに一起だも得ず。我今飢虚して力なし能汝と共に語らんや。比丘佛語を聞き已つて悲涙自ら勝ふること能はず。即自念言すらく佛は是れ無上の福田、衆生の覆護なり。我れ此三衣を賣つて一盞の飯を購ひ佛に奉らん今正に其の時也。是念を作し已て一盞の飯を買得て急ぎ往いて佛に上る。佛知ろめして故らに問て言はく、比丘時年飢儉して人皆餓死す汝今何れの處にて此一盞純色の飯を得來るや。比丘前の如く具に白す。佛又言はく比丘三衣は卽是三世諸佛之幢相なり此衣の因縁極て尊く極て重く極て恩あり。汝今此飯に易へ得て我に與ふるこそ大に汝が好意を領すれども、我れ此飯を消せじ、比丘、重て佛に白して言さく。佛は是れ三界の福田、聖中の極なるすら、尙消せずこの玉は、佛を除て已外誰か能く消せん。佛の言く比丘汝に父母有りや不や。答て言さく有り、汝、將て父母を供養し去れ。比丘言さく佛尙消せずこの玉ふ、我が父母豈能く消せんや。佛の言はく消することを得ん。何を以ての故に父母能く汝が身を生ず汝に於て大重恩あり此によつて消することを得ん。佛又比丘に問玉ふ、汝が父母、佛を信する心ありや不や。比丘言さく都て信心なし。佛の言く今信心有るべし汝が飯を與ふるを見れば大に歡喜を生ぜん、此に因て卽信心を發し先づ教へて三歸戒を受けしめよ卽ち能く此食を消せん也。時に比丘既に佛の教を受けて黙仰して去りぬ。此文の典據は傳通記には五分律になれど、糝鈔には五分律本文未勸ありて出所明かならず。

此趣意は出世間の福田より世間の福田を重んずる例として大師は世間道德の輕んずべからざるを立證されたものである  
(奉事師長、修十善業、等の説明省略。)

二に戒福とは三歸戒を始とし五戒、八戒(在家の戒)、十戒(沙彌戒)、二百五十戒(比丘戒)、五百戒(比丘尼戒)、三聚戒、十無盡戒(菩薩戒)等あり。

第三行福。前の戒福と此行福とは第一の世福に對して出世間の福田なり。佛果菩提と云ふ究竟の目的に達せんには廣大志願心なかるべからず。之を發菩提心と云ふ。深信因果とは苦樂の因果を信ずること、讀誦大乘とは大乘經を讀誦すれば智眼開けて苦界を厭ひ涅槃を欣ぶに至るこ。

導師の此解釋に従へば讀誦大乘は夫自身が往因となるにあらず、之が縁となりて厭欣心を生ずるに止まる様に察せらる。傳通記之に關して述べて曰く。仰て如來を信じて偏に經典を讀む。經典は如來の金言なり。故に言音の下に無盡の善を生ず。修多羅の章句功德難思なりといふ。之に従へば讀誦即行善となる。選擇集によれば、世、戒、行三福夫々餘行なくして往生の業となる。是れ淨土宗觀無量壽經の意也とあり。之によれば讀誦また往生の業となること明なり。

正宗分散善義中の九品と此三福と如何なる關係ありや。若し九品と三福と開合の異とせば、立義分によれば九品皆念佛を詮要とすこあれば三福中にも念佛なかるべからず。佛意を窺へば三福中に必ず念佛なかるべからず。然らば其念佛は三福中何れの文に相當するや。恐くは讀誦大乘中に攝するなるべし。然る所以は、四句の偈文によるも究竟大乘淨土門諸行往生稱名勝であるから大乘經の肝要は稱名念佛にあり、故に序分の散善中にも此念佛なかるべからず。選擇集には九品とは前の三福を開して九品とす云ひ、下三品臨終の念佛は第三福大乘の意也と判ぜらる、よりすれば明に念佛は讀誦大乘中にあり。

此散善の行は唯凡夫のみの行する劣行にあらずして三世の諸佛も之に依つて成佛する勝行なることを顯示し玉ふ。

最後に韋提の間の教我正受到答へ玉はんこし、曠劫に希に聞く今始て一大事を説かんこするが故に阿難と夫人との二人に命じて諦聽々々善思念之に注意せらる。而て極樂淨土を觀見せしめん佛の神通力を以て鏡に向つて我面を見るが如くならしむ。韋提希親く極樂の境界を觀見せしが故に歡喜踊躍して信思に住す。佛は夫人のみならず未來世一切凡夫にも見佛せしめんこして、韋提も汝等と異なるなき凡夫なり、汝等も專心念佛せば見佛往生すべきを勸めんが爲めに韋提も凡夫心想羸劣の言へり。汝韋提自己の力にて觀見せしにあらず、如來の方便力なることを説かれたれば方めて其事を知り、妾は佛力によつて遠き極樂を今此處にて拜するこを得しが、佛滅後の一切衆生等是如何にして極樂界を觀見するこが出来ませうと向ひ玉ふ。此一科を定善示觀緣と分科されたのである。

以上簡單に其梗概を叙述せるが、序分義としての要點は、王宮内の一大悲劇にある。高祖大師が特に觀經を御選びになつた理由は、相傳の經、有緣の經と云ふこになつて居るが、余は拜察するに、導師が末代一切凡夫を正客としての宗旨を開かんには機教相應の教義を選ばねばならぬ。然るに此經は頻婆沙羅王、韋提希夫人が、實子の爲めに深宮に幽閉監禁せられ、全く我身の自由を縛られ、自身力にては其束縛を脱すること能はざるを自覺して佛陀世尊に救濟を悃願せられ、佛力によつて方めて身心の解脱を得られた。と云ふ處に着眼せられ我等罪惡生死の凡夫は悉く韋提希の如く自由を束縛せられて居る身の上にて、自己の力によりては解脱を得るの術べなく、専ら、阿彌陀如來の大願業力を増上縁とするより外に道なきこを知らしむるには、本經の如き人世の悲惨を縮圖としたる王宮内の出來事を緣起としたるものにより、信法の前に信機を、即信機信法の教義を説かれる爲めに主として此經に依られたものではなからうか。